

『論考』と『探究』の根本的な相違について：

上田氏への返答

鬼界 彰夫

I.

上田氏の論文「ウィトゲンシュタインにおける主体の問題」は拙著『ウィトゲンシュタインはこう考えた』の「主体」に関する解釈・叙述に関していくつかの疑問を提示している。しかし同論文では、批判の対象となる拙著の具体的表現や箇所、および拙著の解釈がターゲットとしているウィトゲンシュタインの具体的なテキストが一切示されていないため、上田氏の批判・疑問の要点と根拠を厳密に把握することは必ずしも容易ではない。それでも全般的な叙述から、それらは拙著の第二部 5.（『論考』の言語的主体についての叙述）、第三部 4.（『論考』の倫理的主体の二つの側面についての叙述）、第五部 2.,3.（『確実性の問題』についての叙述）に対して提示されたものだと推測できる。以下では、その中で趣旨が明確な三つの疑問に対して返答したい。

II.

上田氏の第一の疑問は、拙著において『論考』の主体概念に関する論述（第二部 5., 第三部 4.）と『確実性の問題』の「私」概念に関する論述（第五部 2.,3.）が連結されている仕方についてのものだと考えられる。それは論文冒頭部で次のように提示されている。

鬼界氏はウィトゲンシュタインの主体の問題をかれの生涯にわたる思索のライトモチーフとされ、全部の遺稿群をその観点から結びつけようとしている。その問題は前期では『論理哲学論考』にみられるふたつの主体概念、言語的主体および、形而上学的・倫理的主体の問題から始まり、中期の『哲学探究』での言語使用・適用の観点からの私的言語批判を経て、最晩年での『確実性の問題』で

の言語主体であると同時に行為主体でもある生の肯定に至る長い道のりである。わたしの疑問はまさにこの点に関わるのであるが、前期ウィトゲンシュタインの主体概念と、後期の主体概念はそのように直結させて理解することが可能であるのか、という点である。(上田論文、p. 35、下線引用者)

上田氏の疑問は最後の文で述べられているが、それが厳密に拙著のどのような内容・叙述に対するどのような疑問なのかは直ちには明らかではない。というのもそこに現れる「そのように直結させて理解する」という表現が、拙著のどのような叙述様態を指しているのかが不明だからである。それは「そのように」という言葉が指し示しているはずの先行する文章の叙述が整合的で明瞭な像を結びにくく、「そのように直結させて」というのがどのように結びつけることなのか測りがたいからである。例えば冒頭の文は、拙著において私が主体という問題をライトモチーフとするという観点から全部の遺稿群を結び付けようとしている、と述べているが、これは拙著の叙述の正確な描写とは言い難い。こうした叙述方針は拙著で明示的に述べられてはいないし、今問題になっている『論考』の主体概念の叙述と『確実性の問題』の主体概念の叙述は、独立の、そして全く異なる形で行われている。すなわち拙著第二部、第三部での『論考』の主体概念に関する叙述は、「主体」という言葉を用い、『論考』にはどのような主体概念が内在しているのかという問いを介して進められているのに対して、第五章部では、その表題が「私」と言語であることが象徴するように、「主体」という言葉は使われず、ムーアの例が代表する「私は知っている」という表現の使用において「私」という言葉が果たしている特別な役割を探るという形で考察が進められている。拙著の両叙述のこうした差異は、その対象となるテキストでのウィトゲンシュタイン自身の叙述の根本的な相違を反映したものである。すなわち一方(『論考』)では「主体」という言葉が使われ、主体とは何かという問いに答えようとして考察が進められているのに対して、他方(『確実性』)で「主体」という言葉は使われず、主体は何かということも問われず、問われているのはムーアの「私は知っている」の使用において示されている「極めて重要な心的状態」(『確実性』§6)とはどのようなものか、そこでの「私」という言葉はどのような役割を果たしているのか、ということであり、それを「主体に関する考察」と形容するのは、場合によっては誤解を生みかねないあくまで間接的な記述でしかない。こうした根本的に異なるウィトゲンシュタインの二つの考察に関する拙著の叙述のどのような側面を上田氏が「直結

させて理解する」と形容されているかは、直ちには明らかでないのである。

しかしながら、『論考』と『確実性』のウィトゲンシュタインの考察の様態が根本的に異なることを念頭において上田氏の疑問を再解釈すれば、そこに有意義な問いを見出すことが可能なように思われる。その問いとは、このように根本的に異なる「主体」を巡る『論考』の考察と、「私は知っている」の「私」を巡る『確実性』の考察をどのように関係付けられるのか、というものである。一つの可能性は、それらを同一主題に関する異なる二つの見解と見るというものであり、その場合我々は、ウィトゲンシュタインは『確実性』において『論考』のものとは根本的に異なる主体概念を示した、と言うことになるが、上で示した両思考の相違は、こうした叙述を受け入れるものではなく、それは事態を捻じ曲げる描写でしかない。つまり『論考』と『確実性』は同じ問いに対して異なる答えを示したのではなく、哲学における問いの立て方、考察の方法を共有していないがゆえに、そもそも同じ問いを共有していないように思われるのである。そして両者のこの決定的な相違の起源は明らかに『哲学探究』の成立にあると考えられるから、我々が直面する問題とは、『論考』と『探究』の考察の関係を巡るものであり、それらは同じ問いに対する異なる答え（例えば、異なる言語観）を示しているのか、もしそうでないのなら、それらの関係をどのように描写すべきなのか、という問いなのである。そしてこうした観点から拙著を見直すなら、この問いに対する明確な答えを持っていないことが拙著の特徴であり、その大きな欠点なのである。上田氏の問いかけは、拙著のこの空隙を的確に指摘したものだとして解釈できるだろう。

もちろんだからといって、両者が全く無関係であると、いわば、全く別人の思考・著作の如きものである、と拙著が想定していたわけではない。同一の哲学者の異なる著作に見られる類似した主題に関する二つの考察として最小限の関係が両者の間に存在するはずだと私は想定していたが、それがどのような関係なのかという問いへの答えを持っていなかったのである。それゆえ私に不明であったこの関係を、「『論考』において一旦封印されたこの必要性〔主体とは何かを明らかにする必要性〕に真に答えうるのは言語を生きる「私」において他にはない。しかしウィトゲンシュタインがこの「私」に出会うまでは、なお気が遠くなるほど困難で長い思考の旅が必要なのである」（前掲拙著、p. 191）という比喩的なあいまいな表現によって示すほかはなかったのである。

拙著執筆当時、私はこの問いへの答えを持っていただけではなく、それは答

えられない問いだと考えていた。すなわち我々に残されたテキストから、『論考』と『探究』の間の大きな断絶関係、しかもその著者が同一人物であるという断絶関係を明らかにすることは不可能だと考えていた。この諦めが変化したのは「日記」(『哲学宗教日記』)との出会いによってである。その出会いは私に、両者の関係は彼の実存と哲学的思考の繋がりを考えることによってのみ明らかになるという見通しを与えた。それに基づいたその後の私の考察の成果が、昨年公刊した『『哲学探究』とはいかなる書物か』に他ならない。それゆえこの書物自身が、上のように解釈した限りでの上田氏の間に対する詳細な答えとなる。

この答えを前提として、『論考』における主体を巡る考察と、『確実性』における「私は知っている」を巡る考察の関係をここで簡単に述べるなら、次のようになる。『論考』は「主体」という言葉を用いた哲学的考察により、我々のある在り方を解明し、そのことにより我々が直面する哲学的問題を解決しようとした。しかし『探究』成立過程において『論考』の著者は、「主体」、「対象」、「認識」、等の哲学的諸概念を用いた考察により我々は、それらの言葉により指し示そうとしているものの本当の姿を認識するのではなく、むしろその本当の姿とかけ離れた錯覚像の虜となることに気づき、しかもこうした捕らわれが、他ならぬ哲学的考察の固有の作用であることを悟り、自分が本来しようと志していたことはむしろ、自分がかつて「哲学」と呼んでいた活動が生み出す誤解を解消することによってのみ達成できると考えて、その後の考察をそのようなものとして行った。『確実性』に見られる考察、なかでも「私は知っている」を巡る考察はそうした営みの一環であると考えられる。

III.

上田氏の第二の疑問は『論考』5.6-5.641に示された「主体」概念に関する拙著の叙述に対するものであるが、それは次のように述べられている。

鬼界氏はこの点〔要素命題が何かは使用に依存するという『論考』5.557の主張〕に着眼し、世界外部のグローバルな倫理的主体とともにその派生であるローカルな倫理的主体としての意志がすでに世界の内部に前提されているとみる。この「わたし」は「わたしの言語」と冒頭で言及された「わたし」が姿をあらわしたものであり、現実の状況のなかで「これ」という仕方で名や命題に意味を付与す

る主体であると解釈する。

しかし、ここで生ずる疑問は、このように言語行為の主体を世界の内部におくことは『論考』における形而上学的主体の概念の超越論的論証を弱めるのではないかということである。（上田論文、p. 36、下線引用者）

上田氏のこの叙述は、主張全体の整合的な像を形成するのが甚だ困難なものであるが、その根本的原因は、拙著の叙述に関する混乱した理解あるいは誤解に基づいていることにある。拙著では主体に関する『論考』5.6-5.641の叙述を、5.6-5.62の前半と5.621-5.641の後半に分け、前半を意味する主体としての「言語的主体」に関するものと、後半を意志する主体としての倫理的（あるいは形而上学的）主体に関するものと解釈し、それぞれについて第一部5.と第三部4.で論じている。こうした解釈は単に私の推測に基づくのではなく、前後半それぞれのテキストが、異なる時期の、異なる主題について記された草稿を起源としているという文献上の事実に基づいている。すなわち前半部のテキストは1915年4月から6月にかけて命題の意味の確定性（曖昧さの排除）を巡って記された草稿を起源としているのに対して、後半部のテキストは1916年6月から10月にかけて自己、生、世界、神、意志といった実存に関わる諸概念について記された草稿（拙著ではそれを「生世界論」と呼んだ）を起源としている¹。こうした区分を解釈上の補助線として設けたうえで拙著はそれぞれを別々に論じているのだが、倫理的主体について論じる際に、さらなる補助概念として「グローバルな主体」と「ローカルな主体」という区別を設けている²。この区別も恣意的なものではなく、倫理的主体に関する『論考』テキストの起源となった草稿の議論を十分に表現するためにはこの区別が必要だからである。すなわち、『論考』の対応部では世界の限界であるような主体（グローバルな主体）しか登場しないのに対して、1916年の草稿ではその意志が世界全体に浸透しているような主体と、世界の中に存在する意志を持つ主体の双方について語られているのであり、その思考を表現するためにこの区別が必要だったのである。それに対して1915年の草稿では、「これ」という語を用い命題の意味を確定することのできる「私」が登場するのみであり、世界の限界としての主体という概念はいまだ登場しないのであり、それゆえ言語的主体を巡る拙著の叙述ではローカルとグローバルの区別は全く用いられていないのである。

上で引用した上田氏の文章は、あたかもこの区別が倫理的主体と言語的主体の双方に適用できるかのように語り、論を進めているが、それは今述べた拙著の叙述の混乱

した理解、すなわち誤解に基づいている。従って上田氏の「このように言語主体を世界の内部におくことは…」という指摘に対して私は、誰も言語的主体を世界の内部に置いてはいない、草稿においてそれは世界内的な存在として登場していたのであり、それが『論考』では「世界の限界」へと変化したのだ、と言わなければならない。そのうえで上田氏には、この変化によりウィトゲンシュタインの思考はどうなったのか、と問いたい。言語的主体であれ倫理的主体であれ、その世界内的な側面が『論考』において消去されることにより彼の思考はより良くなったのか、と問いたい。おそらく上田氏は、それにより「形而上学的主体の概念の超越論的論証」（上田論文、p. 36）が強まり、「『論考』の美しさ」（同）は増大した、と答えるであろう。それに対して私は更に、『論考』から削除された草稿のそれらの思考は、何の内的必然性もないものだったのか、何の矛盾やひずみを生むことなく消去できるようなものだったのか、むしろそのように考えざるを得ないものではなかったのか、と問いたい。もしそれらが本質的に消去不可能な思考であったのなら、『論考』の美は内なるひずみを隠ぺいすることによって実現したことになる。そしてそれを美しいと思いつけるためには、そのひずみから目を背け続けなければならないだろう。『論考』を著わした精神に、そうした自己欺瞞の状態にあり続けることが可能だったのか、という問いは、『論考』の徹底的破壊は、実は『論考』という存在自身の必然的帰結であったのではないかという思考へと我々を導くのである。

IV.

上田氏の第三の疑問は、拙著第五部で示された『確実性の問題』の解釈、とりわけウィトゲンシュタインとムーアの関係に関するものであり、次のように表現されている。

わたしはこの命題 [「わたしはここに手があるのを知っている」という言明] にウィトゲンシュタインは同化したのではなく、ムーアのとった方法は懐疑論の反駁としては不十分であると指摘したかったのであると考えている。「知る」の一般的な用法からみると、ムーアの命題は異常であり、正当化不要の事実を無理に正当化しようとして逆に懐疑論者の畏に陥っているのだとウィトゲンシュタインは批判しているのではないだろうか。（上田論文、p. 38）

この疑問も拙著の叙述の不完全な理解に基づいているように思われる。『確実性』において確かにウィトゲンシュタインはムーアの言明における「知る」の用法に批判的な立場に立っている。しかしそれは『確実性』の第一部から第三部途中までのことであり、第三部途中からウィトゲンシュタインの思考は、ムーアの言明が表現する特別な確実性の意味、そこでの「私」という言葉の使用が担っている特別な役割の探究へと向かってゆくのであり、それは拙著 pp. 362-68 で述べられているとおりでである。上田氏の論述は明らかにこうした変化を無視しているように思われる。他方、もし上田氏が『確実性』におけるムーアを巡る思考のこうした変化を承知の上で上のような疑問を呈しているのだとすれば、第三部後半以降の考察をどう解釈し、どう評価するのか、ということをも氏に問う必要がある。ムーアに対してより共感的な立場から進められているそれらの考察は量的に『確実性』の過半を占めるものであり、しかもウィトゲンシュタインの死の数日前まで続けられた「最後の思考」と呼びうるものなのだから、十分な理由なくしてそれを軽視することは解釈上適切な態度ではないと私は考える。

但しこの点に関しては、拙著の叙述にそうした誤解を誘発する要素がなかったとは言えない。それはムーアに対する態度がどのように変化し、その結果どのようにしてウィトゲンシュタインの思考が新しい段階へと入って行ったのかに関する詳細な叙述がそこでなされていないからである。拙著がそのようになっているのは、もしそうした叙述をするとすれば、拙著が分量的に膨大となるばかりでなく、内容的にも高度に専門的なものにならざるを得なかったからである。舞台裏を明かすなら拙著第五部は、それに先立って独立の研究として執筆された数編の研究論文³の可能な限り良心的な要約として書かれたのである。幸いそれらの論文が近く一冊の本⁴として出版される予定なので、ムーアに対する態度の変化の詳細な過程については、その第二部を参照していただければ幸いである。

¹ 『論考』に二種の主体が存在することについては『ウィトゲンシュタインはこう考えた』 pp. 160-164 参照。

² 同書 pp.175-190.

³ 拙論の一覧は次の通り。

『『確実性について』に関する一考察』科学哲学 **31**(1998), pp. 35-51.

『『確実性について』の主題と構造 (上)』言語文化論集 **46**(1998), pp. 149-179.

『『確実性について』の主題と構造 (中)』言語文化論集 **47**(1998), pp. 53-96.

「『確実性について』の主題と構造(下)」言語文化論集 **48**(1998), pp. 23-54.

「『確実性について』におけるウィトゲンシュタインの思考(1) - 第二部 (§§66-192) の分析を通じて-」言語文化論集 **49**(1999), pp. 39-127.

「『確実性について』におけるウィトゲンシュタインの思考(2) - 第三部 (§§193-299) の分析を通じて-」言語文化論集 **52**(2000), pp. 101-149.

「ウィトゲンシュタイン最後の思考-『確実性について』第四部: §§300-676 を巡って-」言語文化論集 **55**(2001), pp. 57-173.

⁴ 鬼界彰夫『ウィトゲンシュタインの思考運動を追う(仮)』皓星社、近刊。

(きかい・あきお 筑波大学人文社会系教授)